

検証に堪えうる客観性必要

昭和という時代が終わってから30年近くの時間が流れた。この6月に成立した特例法(正確には「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」)により、2年以内には皇太子が即位する形になり、元号もまた変わる。昭和はますます遠のいていくことだろう。

とはいえ近代日本史にあって、昭和という時代は時間を経るにつれ、なお一層その重みを増していく。この時代には人類史が体験した社会現象のすべてが詰まっているわけだから、昭和という時代には日本人がどのように変わっていったのか、それが明確にあらわれているように思う。昭和20年代、30年代の史学科の学生の中には、明治維新を卒業論文のテーマに選ぶ者が多かったのだが、これからは昭和という時代をテーマに論文を書く者が多くなると、私には思える。

昭和史に関わる書は往々にして、次の五つのパターンに分かれている。箇条書きにしてみよう。(1)学術書(研究書)(2)小説(3)ノンフィクション(4)啓蒙(けいもう)書(5)回想録・体験談――といったところだが、この2、3年の書物の刊行リストを見ると、(1)と(5)が増えていることがわかる。(1)については、1970年代、80年代生まれの若手研究者が、歴史書刊行の版元から出す例が目につく。「あとがき」などを読むと、研究助成金をもらって著した学術書で使わなかった素材を一般大衆向けに著している。

私が読者として、これらの書を読んで驚くのは、内容はピンからキリまで幅広いのだが、共通して師の教えの枠内にとどまっていて、「良い子の作文」といった趣なのである。「あとがき」の最後の5行ほどでベタベタした人間感情を書き連ねているのはその証拠である。たぶんこの分野で、新しい学説、観点を示すのは数人の研究者にとどまるように思う。

(5)については、昭和前期の戦争体験を中心にしての回想記(既に当人は死亡しているが、死後に彼らのつづった一文が発見されて、子や孫が出版するケース)が圧倒的に多い。私のもとにも毎月何冊か送られてくるのだが、十分に校正がされていなかったり、あるいは思い込みの内容も多い。なかには「陸軍大学校を受験したが、不合格なので、私立大学に進んだ」などと書く、いいかげんな書も多い。

私は職業として(3)を執筆する著述家である。史実を各種の記録文書などで確認し、当事者を取材し、関係者の証言をできるだけ精査したうえでノンフィクションを書く。この分野では、早くは60年ごろから作家の松本清張が、下山事件や帝銀事件など戦後の占領期に起きた各種の不透明な事件をテーマにして、「日本の黒い霧」を著して

いる。松本はこのあと60年代に「昭和史発掘」を発表し、昭和史を題材にするノンフィクションの分野を確立している。ちなみにこの分野の小説(前述の(2)になるわけだが)は、昭和28(53)年に直木賞を受賞した立野信之の「叛乱」などがそうであろう。昭和史のノンフィクションはまず松本清張によって始まり、その後さまざまな作家がこの分野の作品を発表した。

私の見るところ、昭和史を題材とした作品としては、澤地久枝「妻たちの二・二六事件」、立花隆「田中角栄研究 全記録」、鎌田慧「自動車絶望工場」、半藤一利「日本のいちばん長い日」などを突破口に、それぞれの分野が確立していった。昭和史のノンフィクションとは、言うまでもなく、「フィクションに非(あら)ず」という大前提のもとで、史実そのものを作家の目で構築していくことである。作家自身が見つめた史実を通して、「真実」をさぐりだす。この「さぐりだす」という点に作家の全知識、全思想、全理念、そして表現技術が投入される。史実をおのれの目で再構築することにより、現実社会の背景に何が流れているのか、それをさぐりだす旅なのである。

現実にノンフィクション界を動かしている後藤正治氏が、その著「探訪 名ノンフィクション」の末尾で沢木耕太郎氏と対談している。沢木氏は「その事実を取材という方法によって手に入れることで成立する書き物」と狭義のノンフィクションを定義づけたうえで、常に第三者によって確かめられる客観性が必要といている。私もこの論にくみする。昭和史のノンフィクションは、特に第三者の検証に堪えられるものでなければならぬということだ。

今、昭和史のノンフィクションは極端に少なくなり、検証など知ったことか、と言いたい放題の歴史エッセーが受けている。なかにはヘイトスピーチ並みの書もあり、それが一定の部数は出ているというのだ。前述の(1)から(5)までは駆逐されつつあるとあっていいであろう。昭和から教訓を学ぶのではなく、検証不能で安易な感動や憎しみを学ぶことでよいのか。ノンフィクションを支えた社会風土が失われるなかで、読み手もまた試されているのである。